

「わたしは道である」

ヨハネによる福音書 14:1-7

教会の暦によると、今週の水曜日は「灰の水曜日」と言って、この日から「受難節」(レント)に入ります。この受難節(レント)は、復活日(イースター)までの日曜日を除く 40 日間の期間を言うわけですが、この期間は特にイエス・キリストの苦難と十字架の死に思いを馳せる期間となっています。「灰の水曜日」とは、昔、受難節を迎えるに際して、頭に灰をかぶって悔い改め、この期間、祝い事を避けて節制に努めたことから、このように呼ばれるようになったようです。今は、そのような習慣はありませんが、昔の人がそままでして、イエスさまの苦しみと十字架の死に思いを寄せ、自らの罪を深く悔い改める時をもったその思いは、大切にすべきことではないかと思えます。

さて、先週私たちは、ヨハネによる福音書 13 章の記事を通して、イエスさまが弟子たちと「最後の晩餐」をされた時のことを学びました。イエスさまは、いよいよ明朝には十字架に磔にされるというその夜、弟子たちと最後の食事をされ、その席で、突然立ち上がって、弟子たち一人一人の汚れた足を洗われました。それは、イエスさまの弟子たちに対する「この上なき愛」(極みまでの愛)から出た行為でした。イエスさまは、このように弟子たちの足を洗うという行為を通して、これから受ける十字架の苦しみと死は、あなた方の罪を贖い清めるためのものであることを示すと共に、あなたがたも互いに愛し合い、仕え合うようにという「模範」を示されたのです。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(14 節)と。イエスさまはその言葉を、34 節で「あなたがたに新しい掟を与える」と言って、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という言葉に言い換えて強調されました。このイエスさまの言葉は、弟子たちにたいする「遺言」のような言葉でした。弟子たちは、このようなイエスさまの身に迫る言葉と行為を通して、イエスさまがどこか遠いところにも行ってしまわないか、という不安と焦りを感じたようです。

今日の箇所少し前の 36 節を見ると、シモン・ペトロがイエスに「主よ、どこへ行かれるのですか」と尋ねています。今まで、イエスさまが何度もご自身の苦難と死について予告し、「時が来た」と言って、最後の別れの時が迫っていることを示してきたのですが、弟子たちはそれを真剣に受け止めようとはせず、自分たちの名誉や出世のことしか考えていなかったのです。この最後の晩餐でのイエスさまの一連の行為と遺言のような言葉を通して、弟子たちはやっと主イエスがどこかに行ってしまう、自分たちは取り残され、見捨てられてしまわないかという不安を感じ、慌てだしたのです。

そこで、イエスさまは、今日の 14 章で「心を騒がせるな。…」という言葉で、さらに踏み込んで、弟子たちへの最後のお別れの言葉を語られたのです。

この14章から16章までの記事は、一般にイエスさまの「訣別の説教」と呼ばれている箇所です。この3章に亘る長いお別れの言葉の中にも、イエスさまがご自分の死を前にしていかに弟子たち一人一人のことを深く愛されたかという「極みまでの愛」を読み取ることができます。

「心を騒がせるな」。イエスさまは、弟子たちの不安と心の動揺を察して、まずこう言われました。この「騒がせる」と訳されている言葉は、嵐などで海が荒れて波立つ様子を表す言葉だそうです。心が波立ち騒ぎ、千々に乱れるということは、私たちも毎日の生活の中でよく経験することではないでしょうか。今、一番私たちの心を騒がせていることは、ロシアがウクライナに武力で侵攻したことです。平和的な外交による解決を願っていましたが、ついに軍事行動に出たことにほんとうに心が痛みます。これが早く終息して、世界的な戦争に広がらないように願うものです。また新型コロナウイルスの世界的な蔓延が未だ収まらず、小さな子どもにまで感染が広がり、命を落とす老人が増え続けていることも、私たちの心を騒がせて止まないことです。さらに地球温暖化や自然災害、原発などによる放射能汚染など、さまざまな恐怖と不安の中に置かれています。

「心を騒がせるな」というイエスさまの言葉は、恐れと不安に取りつかれた弟子たちに語られた言葉ですが、この言葉は今日の私たちにも語られている主イエスの慰めと励ましのようにも聞こえます。弟子たちの直面している恐れと不安と、私たちの直面しているそれとは、勿論、その内容において違いがありますが、その「心を騒がせる」恐れと不安の根底にあるものは、「死への恐怖」ではないかと思います。

ついこの前の朝日新聞の声の欄に、大阪の13歳の女子中学生の以下のような投書が載っていました。「死んだらどうなるのだろう。私はよく、そんなことを考える。天国や地獄という死後の世界が本当にあって、そこで存在し続けることができるのなら、そう願いたい。けれども、死によって私の意識も、心も、何もかもが永遠に消え失せてしまうとしたら…。今これを書きながらも私は、底なし沼に沈んでいくような恐怖に襲われている。そして、『まだ私は若いから』と思考を中断するのだ。この恐怖からどうやって逃げたいんだろう。大人になったら怖くなくなるのだろうか。死は、この世で命をさずけられた生き物すべての宿命なのだ、改めて思う。生きるということは、死へ近づいていくこと。恐ろしいが、しかしそれに気づいたからこそ、この命を何かのため、誰かのために使い切りたいとも思う。死ぬ時、わたしは十分頑張ったと思えるような人生にしたい。そのために、私はどうしたらいい？ 答えを見つけるべく、今この時を生きていこうと思う」。

中学1年生の女の子の文章とは思えないようなしっかりとした文章に、私は大変感心し、ある面、共感しました。たしかに死は私たちにとって恐怖です。だからこそ、人は自らの死を見つめることによって、与えられている生を悔いなきものにするために、より良く生きようとするわけです。中世の修道僧たちは、お互いの挨拶の中で「メメントモリ」と

いう言葉を交わしたそうです。これはラテン語で「死を覚えよ」という意味です。お互いに「死すべきものである」ことを自覚しあうことによって、今日という一日を悔いのないように精一杯生きよう！という挨拶なのです。

しかし、人ははたして、少女の言うように、死を恐怖し、それを「宿命」としてあきらめるだけで、その命を「何かのため誰かのために使い切りたい」と積極的、前向きにとらえることができるであろうかと、疑問に思います。修道士たちの交わした「メメントモリ」(死を覚えよ)という言葉は、ただ死を恐怖をもって覚えるということではなく、「メメント・ドミニ」(神を覚えよ)ということを前提としているのです。つまり神を信じる信仰をもって、死を自覚することによって、死の恐怖から解放され、今生かされていることへの喜びと感謝をもって、「この命を何かのため、誰かのために用いたい、悔いなき生き方をしたい」という、前向きで積極的な生き方が生まれるのです。

「心を騒がせるな」と言われたイエスさまが、続いて弟子たちに「**神を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい**」(1節)と言われたのは、そのためです。死への恐れと不安は、多かれ少なかれ、誰しものが抱く人間の自然な感情ですが、そこからは諦めと「何をやっても無駄だ」という虚しさしか生まれて来ません。私たちの生も死も父なる神さまの御手の内にあり、主イエスキリストによって、死のかなたに新しい命と居場所が用意されているということを知ることが、死を見つめつつ、今の時をより良く生きる道なのです。

そのことをイエスさまは2節で、「**わたしの父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。**」という言葉で語られたのです。私たちの命は、死をもって終わるものではありません。キリストにある明日があるのです。それは、天にある神さまの御許に場所を用意されて、そこで安らかに憩おう輝かしい明日なのです。イエスさまは、その天の住まいに、後から来る者たちを迎える準備のために、一足先に、父のもとに帰る、と言われるのです。

私たち人間はだれでも、その罪のゆえに、そのままでは天国に行けるわけではないのです。私たちの罪をイエスさまが代わりに担って贖ってくださったことによって、その罪が赦されて、初めて「神の子」として神さまに受け入れられ、み許に居場所を与えられて、憩おうことが出来るのです。イエスさまは、そのために十字架にかかり、死んで甦るということと言われたのです。「**行って、あなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる**」(3節)と。

死別の別れは、誰にとっても辛く悲しいものです。弟子たちにとって、イエスさまとの別れは、最後まで、受け入れがたいものでした。その弟子たちの心中を察して、イエスさまは、「また戻って来てあなたがたを迎える」と言われ、たとえ今別れても「わたしは、いつもあなたがたと一緒だ」と言われたのです。これは、「天国でまた一緒になれる」と

いう意味でもありますが、信仰による交わりは、死によって断ち切られるものではなく、永遠に続くのだ、という意味でもあります。

弟子たちにとって、このイエスさまの言葉はよく理解できなかつたようです。理解できないというより、イエスさまとお別れを素直に受け入れることが出来なかつたのです。そこで、トマスが尋ねたのです。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか」(5節)。

それに対してイエスさまは言われたのです。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない」(6節)と。

これは、聖書の中でも特にみんなから愛読されているみ言葉です。「わたしは道であり、真理であり、命である」。これはイエスさまご自身のこの世における役割を端的に言い表した言葉だと思います。この「道」「真理」「命」は、それぞれイエスさまの特質を言い表した言葉ですが、これは三つの特質というよりも「真理と命に至る道」と、「道」に重点が置かれている言葉だと思います。「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない」と言われたように、私たちはイエスさまを通して、天の父なる神さまのを知り、イエスさまを通して神の救いにあずかり、イエスさまを通して神さまの御許に近づくことが出来るからです。イエスさまによらなければ、私たちは誰一人として、神さまと和解することが出来ず、神の真理と永遠の命にあずかることが出来なかつたのです。イエスさまはこの「道」をお示しになるために、神からこの世に遣わされ、十字架の死と復活を通して、父なる神の御許へと帰られたのです。それは、主に従う者たちが、その「道」を辿って神さまの御許に招かれ、そこに永遠の居場所を与えられるためです。

「道」は、地図を見るように、眺めているだけでは意味がないのです。自分の足でその道を踏みしめて、一步一步あるくことによって、目的地に着くことが出来るのです。道は歩くためにあるのです。イエス・キリストの歩まれたその歩みに従って、一步一步、歩くこと、これがキリスト教の信仰なのです。ですからある人は、「キリスト教」というより、「キリスト道」と言うべきだといいます。単なる「教え」ではなく、歩いて実践する「道」だからです。

今、私たちは、絶えず死の不安に脅かされるような環境の中にありますが、このような時こそ「心を騒がせるな。神を信じ、わたしをも信じなさい」との主イエスのみ言葉に慰められ励まされつつ、「わたしは道である」と言われた十字架と復活の主の御声に従って、その道を歩み、共に神のみ国にあずかるものでありたいと願います。 アーメン